

江戸時代の漢語法書にみられる「活字・死字」について

國 金 海 二

中国における助字・虚字などの研究に刺激され、わが江戸時代にも盛んに研究され、また出版された漢語学の著作、とくに助字（助辞・語助とも）の専門書の中に活字・死字という術語が散見する。

周知のように、江戸時代の漢語学においては、漢字を分類して、実字（現代の日本語の分類になおして、ほぼ名詞）・虚字（同じく、動詞・形容詞）、助字（同じく、助動詞・助詞・副詞、それと日本語にあてはめてよむ習慣のない前置詞など）とするのが一般的であるが、それらと全く異なる活字・死字という術語が何に由来するかを明らかにし、その概念を規定するのが小論の目的である。

① 江戸時代には、活字は態字・用字、または単に用、死字は体字、または体という名称も行なわれたが、小論では活字・死字についてのみ論ずる。

② 小論も引用文を除いて、すべてこの分類に従った。

（一）中国においてもこの術語は使用されており、その主なものに南宋時代、詩について論じた「対牀夜語」（范晞文）・「詩人玉屑」（魏慶之）・「鶴林玉露」（羅大経）、降って明朝には、助字の専門書であり、わが江戸時代の助字研究に最も大きな影響を与えたと考えられる「助語辞」（盧以緯）および詩論書の「対類」（著者不明、清朝には虚字についての専書である「虚字説」（袁仁林）などがある。

「対牀夜語」・「詩人玉屑」の二書については、実字・虚字（虚字）・虚死字（助字）などについて述べられた論文（青木正児「虚字考」〈中国文学報〉第四号）があり、それによれば、「対牀夜語」には「虚活字は極めて下し難し、虚死字は尤も易からず、蓋し是れ死字と雖も、之をして活かしめんと欲す。此れ難しと為す所以なり」とあり、

また「詩人玉屑」には「眼に活字を用う」とあり、ここでいう活字は虚活字の略称であらうとしている。（「対牀夜語」中の死字は虚死字の略称であることは問題ない）

そして二書中に用いられている術語について「実字は名詞を主として形容詞中の数詞のみが之に加はり、虚活字は動詞、虚死字は副詞・形容詞・前置詞・同動詞其他の助辭を含むのである。」と論じている。

以上のごとく、この二書に用いられている活字とは虚活字のことであり、江戸時代の学者の分類により虚字に当たり、死字とは虚死字のことと同じく助字に当たると言えよう。

「鶴林玉露」には

作詩要ニ健字擡拄、要ニ活字幹旋……擡拄如屋之有柱、幹旋如車之有軸。（卷六）

とあり、用例をあげて何・且・豈・応などを活字としているが、これらはわが国の分類によれば助字に当たるものである。

これら南宋の詩論書に対して「助語辭」では、「助字の中に活字と死字とがある」とする全く異なった考え方を、次のように述べている。

所。亦指ニ事為ニ而言。如ニ所レ能所レ学之類。比ニ于字ニ所レ指之義絶不レ同。所字活、于字死。

于是死字、故所レ指之事亦不レ活。如フ志ニ于学ニ之類、但指ニ其事ニ耳。所是活字、若レ曰レ所レ学、是明指フ其習ニ学之ニ而為ニ其事ニ也。

この「助語辭」における盧以緯の考え方は、従来のわが国人の助字に対する認識とは異なっており、これを最も詳しく解説した「訓蒙助語辭諺解大成」（毛利貞斎、宝永五年、一七〇八刊）には次のように解説している。

于ハ元来体ヲ不レ認字ナレバ、下地カラ死字ナル故ニ、助語ニ用ヒテ所ニ指呼ニモ、無レ勢死字トナルナリ、又此外ニ、于字ヲ、オイテ、コ、ニ、ユクト訓ズレドモ共ニ無レ体態字ナレバナリ

所。所ノ字ハ、根元居所処ト義同ジク有レ体テ活字ナリ、彼所ノ学ト云フガ如キモ、身心ノ内外ニ受ケテ、稽古ノ功ヲ積ントテ、孜々勉焉ノ力ヲ竭スノ事業ヲ指スニ依テ、助字ノ勢活シ、所ニ指言ニ無レ透間、直ニ説クニ依テ、活句トナルトナリ

この「諺解大成」の解説は、「于・所」が実体を有する字か、有しない字かで活字・死字の区別をなしている。これは盧以緯の考え方を正確に解釈しているか否かは推測で

きないが、中国の字書類や以後の日本の著作にはみられない貞斎独特の思考方法である。特に実体のない態字（虚字と同質語と考えてよい）を死字としているのが特異である。

「対類」には

蓋字之有_レ形体_一者為_レ実、字之無_レ形体_一者為_レ虚、似_レ有而無者為_レ半虚、似_レ無而有者為_レ半実。実者皆是死字、惟虚字則有_レ死有_レ活、死謂_レ其自然而然者、如_レ高下洪纖之類_一是也。活謂_レ其使_レ然而然者、如_レ飛潛變化之類_一是也。虚字對_レ虚、実字對_レ実、半虚半実者亦然。最是死字不可_レ對_レ以活字、活字不可_レ對_レ以死字、此而不_レ審、則文理謬矣。（習対格式）

とあり、形体あるものを表す語を死字とし、それに対応するものを活字としている。そして同書では語を分類して実字・虚字（虚活・虚死）・助辞としており、語例をみると天・地・桃・梅などを実字としていることから死字とは実字のことであり、従って活字は虚字とみることができる。

「虚字説」には

実字虚用、死字活用。此等用法、雖_レ字書亦不能_レ偏

釈。如_レ人_ニ其人_一、火_ニ其書_一、廬_ニ其居_一、墟_ニ其国_一、草_ニ其朝_一、生_レ死肉_レ骨_一、土_レ国城_レ漕_レ之類_一、上一字俱係_レ死実字、一經如此用_レ之、頓成_レ虚活_一、凡死皆可_レ活。

耳目体也、死実字也。視聴用也、半虚半実字也。とあり、死字は実字と同意語であると考えられる。

以上六書のうち、助字に活字・死字の別があるとする「助語辞」を除いて表示すると次のようになる。

	対 類	鶴 林 玉 露	詩 人 玉 屑	対 牀 夜 語	
虚 字 説	虚 字	助 字	虚 字	虚 字	活 字
	実 字		助 字	助 字	死 字

⑧ 於_レ・于_レ・乎などのいわゆるヲキ字については「倭読要領」に「乎」字について、「句中ニ在テ、於_レ字ノ如クナル処アリ、然ルヲ莊子ニ、有_レ乎生_一、有_レ乎死_一、有_レ乎出_一、有_レ乎入_一トイヘルハ、句中ニ在テ、何ノ意義モ無シ」とあるように、助字「乎」などに、文中の位置によっては何の意義をも認めないか、見すごしてしまうのが普通の認識であったと思われる。

(二)

中国では、このように種々の内容をもって用いられた活字・死字という術語は、わが江戸時代の著作中ではどのように用いられていたか。

管見の及ぶかぎりでは、「点例」・「語助訳辞」・「倭読要領」・「訳文箋蹄」・「訓訳示蒙」・「助辞訳通」・「文語解」・「谷氏助字解」・「助辞鶴」・「訓点復古」など十書にみられる。

これらの書には活字・死字の定義を記しているものもある。次にその定義と具体的用例について考察してみる。

⑩ 漢語学以外の書では、「語孟字義」(伊藤仁斎、一七〇六刊)・「童子問」(同、一七〇七刊)などにも用いられており、また「和訓栞」(谷川士清、一七七七以後続刊)にも「訓訳示蒙」からの引用ではあるが活字・死字の語がみえており、一般に通行していた名称であったと考えられる。

○「点例」(貝原益軒、元禄十六年、一七〇三序)

昔者吾友從事於斯^{ヤリ}矣^ハ 泰伯 コトニコ、ニシタカヘリトヨムヘカラス 事ノ字從事ノ時ハ活字也 コトニトヨメハ死字トナル シタカヒコト、セリト云意也 専ニ務ムル意也(「従事」の項)

管見では、「助語辞」を解説した書以外では、はじめ活字・死字の語を用いたものと思われる(「語孟字義」など漢語学以外の書を除いて)。本書では実字・虚字等の名称は使用しておらず、それらと同質の語とみられる。

○「語助訳辞」(松井河渠、享保三年、一七一八尾語)

所ノ字モ亦于ノ字ノ如ク事為^{ナラ}指^{サシ}テ云辞也(中略) 所ノ字ハ活字ナリ 于ノ字ハ死字ナリ 只今ハタラク所ヲ活^{イダシ}ト云ヒ 有ゴトハアレドモ只今スハリテアルヲ死字ト云フナリ 譬ヘバ飲食ノ二字ヲ云フトキ ノミモノ・クヒモノト云フ時ハ死字ナリ ノムト云ヒクラフト云フ時ハ活字ナリ 諸字トモニ此ノ意ヲ以テ活字死字ヲ弁ヘ知ベシ(「所」の項)

本書は「助語辞」を和語で平易に解説した書であり、従って活字・死字の術語が用いられているのはもちろんであるが、「諺解大成」において実体の有無を活字・死字の区別の基準とするのに対して、一語のその場における用法を基準とし虚字的用法を活字とし、実字的用法を死字としている。

この活字(本書では実字・虚字等の名称は用いていないので、虚字と同質語とみてよい)・死字(同じく実字とみ

てよい)の定義は、以後の漢語学における考え方の大勢を占めるものであり、また「桂庵和尚家法倭点」(桂庵、明応十年、一五〇一成立)に言う体・用の定義と同じく、体〓死字〓(実字)、用〓活字〓(虚字)という関係を明確にするものである。

⑪「家法倭点」に「食字、イ、ト云時ハ駄也。音嗣。クラフト云時ハ用也。音シヨク」とある。

○「倭読要領」(太宰春台、享保十三年、一七二八序)

夫子之言性天道ヲ、夫子ノコト、読ムハ誤ナリ。此八字一句ナリ夫子ノ性ト天道トヲノタマフハト読ベシ。俗儒句読ヲ知ラズ。亦言字ノ活字ナルコトヲモ知ラズ(「倭読正誤」の項)

本書でも実字・虚字等の術語は用いていない。また死字という名称も使用していないので春台は実字をどのように呼称していたかは判明できないが、例文で推測するかぎり活字は虚字と同意語であらう。

○「訳文箋蹄初編」(荻生徂徠、正徳四年、一七一四刊)

○「訳文箋蹄後編」(同、寛政八年、一七九六刊)

料。ハカルカソフトヨム 元来マスメヲカソユルコト也

(中略)死字ニ用ユルトキ廩料三品料ハ禄ノコトナリ居。起ノ反对ナリ(中略)活字ニ用ル時ハ居ハ起ト対スウチナナル意ナリ

本書の「題言十則」・「凡例三則」では、実字(物名字面)・虚字(作用字面)・半虚字(形状字面)・助字(声辭字面)について論じているが、虚字・半虚字を次の「訓訳示蒙」のごとく一つにみれば一般的な分類と変わるところはない。しかし活字・死字については言及しておらず、その詳細は不明であるが右に記した例文についてみると、活字は虚字、死字は実字と同意語として用いられていることは明らかである。

○「訓訳示蒙」(荻生徂徠、明和三年、一七六六刊)

之。(前略)死字ノ上ニ載カスレバ、コノトヨム、之人之子之屏之翰ノ類ナリ

却。(前略)却ハ多クハ活字ノ下ニ付ル助語ナリ

斬却

沽却ナドナリ

これによれば、死字とは、人・子・屏・翰などであり、

「訳文箋蹄」でいう実字に当たり、活字とは斬・沽などで、同じく虚字に当たることがわかる。

また本書では活字・死字について次のように述べてい

る。

死活ト云ハ　タトヘハ清字　字ノマ、ナレバキヨシトヨム　死字ニスル時ハキヨキトヨム　活字ニスル時ハキヨムトヨム　歌字　字ノマ、ナレハウタフトヨム　死字ニスル時ハウタトヨム　活字ニスル時ハウタハシムトヨム　舞字　字ノマ、ナレハマフトヨム　死字ニスレバマヒトヨム　活字ニスル時ハマハストヨム（卷一）

これによれば、死字とは、ある語を名詞形（ウタ・マヒ）、または連体修飾語（キヨキ）とした場合、活字とは、それを使役形や他動詞形（ウタハシム・マハス・キヨム）として用いる場合である。

この徂徠の考え方（名詞形を死字とする考え方以外）は、わが国の他の著作には見られないものであるが、前述の「対類」に述べられたものと共通するものがある（徂徠が「対類」を参考にしたか否かは未詳）。

すなわち、連体修飾語を死字とするについては、「対類」の「上虚死下実」の例語に、長天・遙天・高空・澄空などを挙げており使役形や他動詞形を活字とすることについては、「活謂其使然然者」とある。

④ この「対類」の考え方は、「馬氏文通」（馬相伯）にも影響したようであり、同書に「孟子、白羽之白也、猶白雪之白。下

二白字、実用也、上二白字、死字也。……或曰活字者、謂其使然而然也。」とある。

○「助辞訳通」（岡白駒、宝暦十二年、一七六二序）

故。（前略）又死字ニ用ヒテ、ユヘト読ム時、縁故ナリ事故ナリ、周易ニ知_{コトヲ}幽明之故_{コトヲ}　是ナリ

本書では実字・虚字等の術語は用いておらず、両者を合わせて正語（実語）と呼んでいるが、この例から推して、死字は一般的な実字の意であろう。活字という語はみられない。

○「文語解」（釈大典、明和九年、一七七二序）

蓋。（前略）嘗ノ下ハ多ク活字用字虚字ナリ　蓋ノ下ハ死字昧字実字ヲ用ルコト多シ　故ニ蓋余トアリテ嘗余トハナシ

非。不ノ下ハ多ク虚ナリ活ナリ用ナリ　非ノ下ハ多ク実ナリ死ナリ体ナリ

本書ではこのように三つずつの術語を用いているが、他の多数の例文から推察してもその間には区別は見出せず、全く同じものとして使用されている。

○「谷氏助字解」(谷眉山、天明五年、一七八五序)

礼。(前略)經書ニ礼ト説キ玉フニ見ヤウアルコトナリ
我ヲ離シテ礼ト云コトアリ 我カ方ヘ引トリワガ行ニシ
テ云コトアリ 我レヲ離シテシタデカラノコトニテ云フ
ハ死字也 我カ方ヘ引トリ云礼ハ活字也

難解な例であるが、活字と明記しているのはこの一例のみであるので挙げる。右の例文の前に礼を解説して「积名曰礼也得其事体也、此レ礼ニシタガヘバ人事ノ体ヲヨク得ルナリ 故ニ体ノ注アリ 最早此注デ程ヨクスル意ヲ含ム」とあり、「礼」を虚字的なもの(この場合は活字という名称を用いて)として使用しているのであろう。

死字に関しては、他の数例からも実字と同意として用いられていると考えられ、二者は混用されている。

○「助辞鵠」(河北景楨、天明五年、一七八五序)

則。(前略)詩匪ニ伊垂^レ之帶則有^レ余 孟子滕君則誠^レ賢君也 書経自ニ一言一話ニ我則惟^ニ成德之^ニ為^ニ 史記ニ子言則可^{ナリ}ノ如キ則ノ字死字ノ下ニアリ

坐。(杜牧の停車坐愛楓林晩の詩句について)牧カ詩ヲ車ヨリオリズ車中ニ坐スルコトスレバ坐^レ字死字ナリ、実語ナリサスレバ此ノ詩何ノ風味モナク坐^レ字モ無用ナ

リ、キナガラトヨメハ活字ナリ

死字は「則」の例文より実字と同意語として用いられていることは明らかである。活字は、ここにもみ使用されている術語なので(「キナガラ」は現在の品詞分類では、副詞、その内容は正確には判断できないが、本書の「届」の項「イタリ又イタルト訓ス 極ノ義ヲ兼ヌ(中略) 詩ニ致^ス天之届于牧之野」此イタリトヨム 天命ノキハメ極ルノ義ナリ 活用シテイタルトモヨム」などにみられる「活用シテ」というところから推して虚字(本書では半虚半実という名称を用いている)であらう。実字は凡例において「実形アル者」と定義している。

○「訓点復古」(日尾荆山、天保六年、一八三五序)

(過則勿^レ憚^ル改^ルについて) 活用スルトハ、生キテハタラクコトニテ、則アヤマツト読時ハ、下ヲコトハトデモ、モノハトデモ、種々ニハタラク也、活用セストハ、死字ニナルナリ、則アヤマチト読トキハ、キマリテシマヒテ、コトハ、トキハ、モノハナド云送りガナヲ附ルコトナラズ、外ヘハタラカヌ字トナルヲ云(「訓点正誤」の項)

本書でも実字・虚字の術語は使用せず、体・用の語(「体

トハ、物ヲ指シテ云詞、用トハ、ハタラク詞也」と定義している）を用いているが、ここでいう死字は実字と考えてよいであろう。活字という名称はみえない。

(三)

以上十書の考察を通して、江戸時代の助字の専門書などにおいて用いられた活字・死字という術語は、その時代に一般的に行なわれていた語の分類による実字（体）・虚字（用）と大略において一致していることがわかる。

これを中国において使用された活字・死字という術語と比較・考察してみると次のごとくである。

①、南宋の詩論書で用いられている活字・死字と、わが国で用いられたものとは、活字と虚字とを同質語としている二書の術語以外全く異なっている。

②、助字を活字・死字に分類する「助語辞」の方法は、わが国著作中の術語には直接影響はみられないが、その解説書「語助訳辞」に代表される分類法―盧以緯の考え方を拡大して、助字以外の語において虚字的に用いられるものを活字とし、実字として用いられるものを死字とする―によって、南宋の詩論書とは死字については質的に異なり、ま

た「助語辞」中の術語とも異なった活字・死字という術語が用いられるようになった。

③、「対類」に述べられている、形体あるものを死字とする定義は、わが邦人の実字を死字とする考え方と同じであり、虚字を活字といい、実字を死字とする用語法が、中国人の著作よりの影響であるとすれば本書からであろう。

(四)

以上、中国および日本で用いられた活字・死字という術語について考察してきたが、これらの術語が、わが国において、一般的呼称である実字・虚字と混用されているのは何によってであろうか。（中国では、先に記した「対類」・「虚字説」によれば死字は実字と同質の語として用いられているようであり、活字も虚字と同等の語として用いられていると推測される）

著者の用語に対する定義づけの曖昧さ・無関心さによる混用は、現代語学よりすれば致し方のないことであるが、実字・虚字という術語の代わりに死字・活字という語を使用する根底には、次のような意識が働いていたように考えられる。そして術語混乱の原因も、その意識と実際の用法とのずれによって生じたと推察される。

第一に、実字とは一般的に実体概念を表すことばであり〔訓詁示蒙〕には「実字トハ天地日月鳥獸草木手足頭尾枝葉根莖等ノ字ナリ」とあり、「助辞鵠」では「実形アル者」と定義づけるなど、他書でもほぼ一定した見解である、例文に示した「過・屈・事」など抽象概念を表すことばは、その範疇に入らないという考え方から死字という語を用いて区別しようという意識が働いた。また、それを虚字として用いる場合には、死字に対するものとして活字という術語を用いたが、「過・屈・事」などは本来虚字としても用いられるものである。

従って活字と虚字とは同質のことばであるが、死字と実字は同質のことばとしては使用していなかったであろう。

第二に、本来「実形アル者」を表すことば（実字）を活用して虚字として用いる場合に活字という術語を用いたが、虚実・死活という対応上より実字という語を用いる代わりに死字とした。〔文語解〕の「之」の項に「死字ヲ活字ニスル時コノ字ヲ用ユ、諸侯用ニ夷礼ニ則夷之夷而進于中国ニ則中国之ニ（韓文 原道）（以下略）」とある。

従って死字と実字は同質のことばであるが、活字と虚字とは同質のことばでないという意識があったであろう。

このように、わが国江戸時代の著作においては、死字とは抽象概念を表す語として用いられたり、実体概念を表す語として用いられたりしており、また、活字は虚字と同質の語として使用されたり、実体概念を表す語（実字）を活用させた語について用いられたりして混乱が生じてきたものと考えられる。

（付）

先にも記したように、漢語学の専門書以外で活字・死字という術語を用いたものに「語孟字義」・「童子問」があり、「語孟字義」では次のように記されている。

道字本活字。所_レ以_レ形_ニ容其生々化々之妙_一也。若_ニ理字_一本死字。從_レ玉里声。謂_ニ玉石之文理_一。可_ニ以_レ形_ニ容事物之条理_一、而不足_ニ以_レ形容天地生々化々之妙_一也。〔語孟字義〕（理）

蓋道以_レ所_レ行言、活字也。理以_レ所_レ存言、死字也。（同）
ここで言う活字・死字と語学専書での用い方とを直ちに結びつけることはできないが、抽象概念を述べる場合に用いられていることに注目したい。

この仁斎の用語法は「語孟字義」の講義始めを天和年間（一六八一～八三）とすれば、わが国で最も早く用いられ

たものと考えられる。

また、これを「対類」・「助語辭」などからの影響であるのか、仁斎独特のものであるのかは速断できないが、詩論書よりのものでないことは明らかであり、また実字・虚字という術語とは異なったものとして使用されている。

⑧ 「語孟字義」には実字・虚字という術語も使用されているが、先儒の訓みに対して異論を述べた個所に用いられており、一般的なものである。

なお伊藤家には東涯・東所の「操觚字訣」があり、「命ズル見ル行クノ類、ハタラキニナル字ヲ虚字ト云、天地日月命令ノ類ヲ実字ト云、ソノカタチアルモノナリ」と定義している。

(五) 結び

前文にも述べたように、わが江戸時代の助字専門書などにみられる活字・死字という術語の源流と語学的用法などについて考察してきたが、次の数項を結論としたい。

一、これらの術語は、中国南宋時代の詩論書に始めて用いられたものと思われるが、それと同質の語として使用されたものではない。

二、わが国における用い方は、「対類」にみられるものとほぼ同じであり、直接影響を受けた著作があるとする

ば本書からではないかと考えられる。

特に徂徠に対する影響は大きいと思われる。

三、「助語辭」よりの影響も考えられるが、それを直接摂取したものではなく、その考え方を基盤とした江戸時代学者の独自の思考方法であろう。

四、活字と虚字、死字と実字とはほぼ同質の語として用いられているが、特にわが国での使用法は四で述べたように、実字を実体概念を表す語として用いる場合には実字、抽象概念を表す語の場合は死字とした。

五、そして、実字と虚字、死字と活字を用語法上対応させようとしたことから混乱が生じ、同一著作中においても混用される原因ともなった。

(本稿を成すにあたって、筑波大学牛島徳次先生より、中国人の著作における活字死字などについてご教示いただいた。深く感謝申し上げます)

(攻玉社高等学校)